

## 緒 言

近年、環境に配慮した都市づくりが目指される中で、地域固有の歴史や文化資産の継承、環境資産としての緑や自然の重要性が叫ばれている。

本研究では、地域、地区、街区の3つの空間レベルにおいて、地域の環境資産として継承されてきた緑の風景的意義を明らかにすることで、居住空間における地域固有の景観形成のあり方を探ることを目的とした。

なお、本論文は5章からなり、各章毎の要旨を以下に述べる。

### 第1章 研究の目的および方法

本章では、既往研究の整理を通じて本研究の位置づけと目的および研究の方法を明確化した。

景観（ランドスケープ）は人間や社会と自然との相互作用によって形成され、それが長い時間的経緯を経て蓄積された地域の総体であると定義でき、居住空間の環境づくりにおいて景観の視点からのアプローチは今後ますます重要になるものと考えられる。なお、景観の視点からアプローチする際には、空間スケールの相違によって景観の質的相違をいかに把握するかが重要であるといわれている。このような状況の中で、空間スケールの相違に着目しながら時間的経緯の中で景観の変遷を把握し、継承されてきた緑環境を抛り所とする景観形成のあり方を体系的に論及した研究事例はほとんどない状況にある。

本研究では、地域（大阪府河内長野市）、地区（神戸市東部地域の3地区）、街区（住宅団地：プロムナード関目）といった3つの空間レベルにおいて、時間的経緯の中で居住空間の環境変化に伴う緑環境の残存形態を把握し、その継承されてきた緑環境の風景的意義を明らかにすることによって、居住空間における地域固有の景観形成に向けた今後の課題と方向性を探ることを目的とした。

### 第2章 地域レベルでの解析結果と考察

本章では、豊かな自然環境と歴史を持つ一方近年急激な市街地の拡大が見られた大阪府河内長野市を対象に、地理情報システムを用いて1932年、67年、94年の景観構造の変遷から継承されてきた緑環境の風景的意義を明らかにすることによって、地域レベルでの地域固有の景観形成に向けた今後の課題と方向性を探った。なお、景観構造は地形と植生との関係から捉えた自然構造と道路や市街地の発展過程と地形との関係から捉えた社会構造を統合化することによって把握した。

景観構造の変遷を捉えると、1932年時点では段丘低地域に向かって櫛状に伸びる支尾根筋が規定する空間領域内で各集落や既成市街地が独立した空間領域の形成による圍繞景観と、背景の山並みと丘陵部の尾根による重畳的な景観を呈していた。段丘低地域が市街地でほぼ埋まる67年時点では前景となる田園の後退によって景観の重畳性が若干低下するものの、1932年時点で保有されていた景観構造は大きくは変化していない。一方、94年時点では丘陵部の尾根に市街地開発が及ぶとともに支尾根筋を横断する都市軸が出現し、社会構造が自然構造に規定されなくなったことにより景観構造が大きく転換されるが、前時期と同様に市域の背景となる山並みが保全されているとともに段丘低地域を取り囲む帯状の樹林地が保全されていることが明らかとなった。

以上の解析結果から、本地域で1994年時点まで継承されてきた緑環境は、地域の骨格を形成する山並み、段丘低地域を取り囲む樹林帯（グリーンベルト）であり、山並みによって地域景観の骨格が、山並みと前景となる樹林帯によって重畳景観が、樹林帯によって圍繞景観が担保されているという本地域で継承されてきた緑環境の風景的意義を明らかにした。

従って、地域レベルにおける今後の地域固有の景観形成に向けては、市域に特徴的な地形形状に裏打ちされた自然構造に立脚した樹林地や樹林帯の保全を図り、圍繞景観や重畳景観という視覚的景観を担保することが課題であると考えられた。

### 第3章 地区レベルでの解析結果と考察

本章では、阪神・淡路大震災による被害とその復興状況が異なる神戸市東部地域の3地区（楠丘、本山、森南地区）を対象に、復興過程の風景に対する居住者の評価を通じて継承されてきた緑環境の風景的意義を明らかにすることによって、地区レベルでの地域固有の景観形成に向けた今後の課題と方向性を探った。なお、本章では航空写真を用いて震災後の緑被地の変遷を捉えるとともに写真投影法を用いて居住者の評価を捉えた。

調査対象の3地区に共通して、居住者が好む風景は主に震災前から継承されてきた風景であり、自然—人工軸上の自然景に評価が集中している。具体的な景としては、公園や並木、山並みなど公的な緑の風景に加え、被害の軽微であった楠丘地区や震災前からの緑環境が多く残る森南地区では私有地内の庭木や生垣などの単体景から通りや路地といった街路景に至る緑の風景も集中して評価されている。また、やや人工景では3地区共通して敷地景に分布が集中しており、本山地区で見られた白い壁面で統一感のある洋風長屋住宅や森南地区に見られた赤鳥居など地区の歴史を象徴する個性的な風景も評価されやすいことが明らかとなった。

以上の解析結果から、復興過程の風景の中で、居住者は震災前から継承されてきた風景を主に評価していることやその風景は全体景から単体景まで多様な空間スケールで評価されているが、その風景は緑の風景からなる自然景が中心となっており、震災前から継承されてきた緑環境の風景的意義を明らかにすることができた。具体的には、全体景では地区の背景となる山並み、街路景では並木や通り沿いに連続する生垣、敷地景では公園や寺院のまとまった緑、個人住宅内のボリューム感のある緑、単体景では公園や私有地に育っている巨樹や古木である。また、敷地景では、地区の歴史を象徴する個性的な施設を含む風景も評価されることが明らかとなり、文化景観の重要性も明らかにした。

従って、地区レベルにおける今後の地域固有の景観形成に向けては、地域レベルと同様に市域に特徴的な地形形状に裏打ちされた自然構造に立脚した樹林地や樹林帯の保全を図り視覚的景観を担保することに加え、地区レベルの景観構造を規定する街路沿いの連続的な緑環境、敷地内の群的な緑環境、添景となる点的な緑環境の保全を図り視覚とともに日常の生活行動によって捉えられる行動的景観を担保することが課題であると考えられた。さらに、この行動的景観では、自然景観ばかりでなく

文化景観も重要となる。

#### 第4章 街区レベルでの解析および考察結果

本章では、従前の樹木と地蔵尊や広場等の地物を積極的に残し、従前の生活環境を継承する建替が試みられた住宅団地（プロムナード関目：大阪市城東区）を対象に、建替後の団地の風景に対する居住者の評価を通じて継承された緑環境の風景的意義を明らかにすることによって、街区レベルでの地域固有の景観形成に向けた今後の課題と方向性を探った。なお、本章では現地調査と資料調査を通じて保存された樹木や地物（総称：保存物）を捉えるとともに写真投影法とヒアリング調査を用いて居住者の評価を捉えた。

戻り入居者（従前居住者）と新規入居者に共通して好む風景では、保存物を含む継承された風景が重複して評価されており、特に、敷地出入口に存在する保存樹を含む風景と広場に位置する移設された地蔵尊を含む風景であることが明らかとなった。また、新規入居者では、線形や位置が継承された広場や歩行者路上に位置する保存樹を含む風景も重複して評価されている。保存物を含む継承された風景を好む理由では、緑が多いや花が綺麗等の視覚のみで捉えた理由に加えて、感覚、行動、記憶の全ての理由があげられている。具体的には、戻り入居者からは保存樹を含む風景では建替前の情景を懐かしむといった記憶、地蔵尊を含む風景では夏の地蔵盆や毎日のお参りといった従前の習慣があげられ、新規入居者からは時間を積み重ねた風貌を指摘する理由があげられることが明らかとなった。

以上の解析結果から、建替後の風景の中で、大きく豊かに成長した姿で保存された樹木を含む風景は戻り入居者にとどまらず新規入居者にも評価されており、団地建替の中で継承された緑環境の風景的意義を明らかにすることができた。特に、敷地出入口や広場、歩行者路という生活行動と関連づけられることによってその意義は高まることを明らかにした。また、やや人工景に位置づけられる地蔵尊を含む風景も評価されることが明らかとなり、文化景観の重要性も明らかにした。さらに、風景的意義は視覚にとどまらず感覚、行動、記憶の全ての側面で発揮されることも明らかにした。

従って、街区レベルにおける今後の地域固有の景観形成に向けては、地区レベルと同様に日常生活行動沿いの点的な緑環境の保全を図り行動的景観を担保することに加え、感覚から生み出される情緒的景観を保全することが課題であると考えられた。さらに、行動的景観や情緒的景観では自然景観ばかりでなく文化景観も重要となる。

#### 第5章 継承されてきた緑環境の風景的意義を通じた景観形成に関する考察

本章では、各章の解析および考察結果を通じて、継承されてきた緑環境の風景的意義から景観形成のあり方を体系的に論及する。各章では、地域レベルから街区レベルに至る時間的経緯を経て蓄積されてきた緑環境の風景的意義とともに、地区や街区レベルでは時間的経緯を経て蓄積されてきた文化景観の風景的意義も明らかにしたが、継承されてきた緑環境は空間スケールにかかわらず居住者にとって記憶を継承する重要な意義をもつとともに、空間スケールによって蓄積されてきた緑環境を構成する要素の重み付けが異なり、これらの風景的意義は多面的な側面を持つものと考えられた。

従って、これらの風景的意義の多面的側面を空間スケールと景観の基盤および構成要素の2軸から整理すると、地域レベルでは主に地形的特性で生み出される自然構造が景観の基盤となり、その上に展開する植生が地域固有の景観を生み出し、視覚を中心とした効果を発揮するものと考えられ、この地域レベルの景観形成では、自然景観を優先させることが重要となる。一方、街区レベルでは街路と街路沿いの単体施設が景観の基盤となり、街路や施設とともに展開する巨樹や古木などの単体の樹木が地域固有の景観を生み出し、日常の生活行動を通じて情緒的側面や行動的側面を中心とした効果を発揮するものと考えられ、この街区レベルでは、単体樹木や文化的資源も含めて文化景観を優先させることが重要となる。地域と街区の中間に位置づけられる地区レベルでは、地域レベルと共通した側面を保有するとともに街区レベルとも共通した側面を持ち、視覚を中心とした効果とともに日常の生活行動と関連した各種の効果を生み出すものと考えられ、この地区レベルでは、自然景観と文化景観を融合させることが重要となるものと考えられた。

以上のように、空間スケールと景観の基盤および構成要素の2軸から地域レベルから街区レベルに至る景観形成のあり方を体系的に探ることによって緑環境を拠り所として地域固有の景観形成が図れるものと考えられる。